2024
12
No. 740

國學院大學学報

「流離」
ともし火の消えゆく如し―。
今日ひと日
たのしみ聴きし
清きことばも
『倭をぐな』
釈　迢空

国学院大学　令和6年12月20日㈮　定期号（毎月20日発行）　1部20円
［発行］国学院大学　［編集］総合企画部広報課　〒150-8440 東京都渋谷区東四丁目10-28　［電話］03（5466）0130　［FAX］03(5466)0528

祭　儀　■ **大祓**　12月24日（火）　午後4時　祭式教室　■ **歳旦祭**　1月1日（水・祝）　午前11時　仮殿

研究者に聞く

日本近代史 ―近代国家形成の軌跡― を探求する理由

法学部・坂本一登教授

明治期を中心とした日本近代史を専門とする坂本一登・法学部教授が、その研究分野へと深入りしていったのには、どんな背景があるのだろう。歴史を巡る大きな文脈と、まだ自身を何者とも思えていなかった若き日の逡巡。その双方の視点から、明治期の政治史へと着地していくプロセスを語ってもらった。明治の政治史は味気ない？　とんでもない。実際は、こんなにも人間臭く、生々しく、面白い。政治的な混沌から近代国家を生み出そうと奮闘した政治家や官僚たちの葛藤。そしてその中から生まれた新たな政治構造やドラマを坂本教授は魅力的な文体で描き出してきた。歴史を巡る巨視的な議論と、迷いつつ歩みを進めてきた自身の人生について語ってもらった。

4・5面に関連記事

陸上競技部 箱根駅伝壮行会

“歴史を変える挑戦 EP.3”で初の総合優勝目指す

東京箱根間往復大学駅伝競走（箱根駅伝）が、令和7年1月2、3日に開催される。国学院大学陸上競技部は今年10月の出雲駅伝で5年ぶり2度目の優勝、11月の全日本大学駅伝で初優勝を飾り、大学三大駅伝2冠を達成。箱根駅伝総合優勝の悲願を成し遂げ、史上6校目の大学三大駅伝3冠達成を目指す。前回大会で総合5位と6年連続でシード権を獲得し、今回が9年連続18回目の出場となる同部は、今期「歴史を変える挑戦 EP.3」というスローガンを掲げ、箱根駅伝総合優勝を目標に活動してきた。この「歴史を変える挑戦」というスローガンは、初めて箱根駅伝のシード権を獲得した年と、箱根駅伝で初の表彰台・総合3位となった年にも掲げていたもので、いずれも同部の歴史的快挙を象徴するもの。同部の本気さがうかがえる。

12月13日に渋谷キャンパスで壮行会が行われ、学生や教職員、同部ファン、報道関係の方など500人以上が詰めかけた。壮行会では、佐柳正三理事長と針本正行学長から激励の言葉が送られ、針本学長＝**写真右**＝から平林清澄主将（経営4＝**同左**）にたすきが授与された。前田康弘監督が「平林主将を中心にチーム力・団結力が高く、メンバー同士が認め合い・敬い合うことができている。総合優勝が有言実行できるように選手たちとともに戦っていきたい」と、平林主将が「『歴史を変える挑戦』のスローガンのもと、総合優勝を成し遂げられるようチーム一丸となって全力で頑張っていきたい」とそれぞれ意気込みを語った。

K:DNA Ⅰ面に関連記事

みはるかすもの

令和6年元日、和やかな正月を過ごそうとする能登半島を震度7の揺れが襲い、津波が押し寄せた。平成19（2007）年の能登半島地震から17年後である。9月には奥能登豪雨による浸水被害。10月下旬に真夏日を記録するなど酷暑が続き、また各地では豪雨による被害が相次いだ▼1月2日には羽田空港で日本航空と海上保安庁の飛行機が衝突、炎上する痛ましい事故が起こった。また某製薬会社の健康被害も忘れられない。かように本年は災害にさいなまれた年であった▼大いなる　まがのいたみに　耐へて生くる　人の言葉に　心打たる／　笑み交はし　やがて涙のわきいづる　復興なりし　街を行きつつ▼先の一首は、上皇陛下が東日本大震災に際し「大きな災難の中にあっても自らを励ましつつ、希望を持ってこれからの日々を生きていこうとする人々の言葉に、心打たれた」ことを、もう一首は、上皇后陛下が阪神大震災から10年の節目に際し「街を行く人々と笑みを交わし、復興の喜びを分かち合いながらも、それぞれの人が乗り越えてきた苦労を思い涙ぐんだ」ことを詠まれた▼あまた到来する災害、人生が予期せぬ方向に進んだ方も多かろう。人生は禍福糾纒というが、人々にとって大きな災いが続く。被災による心身の傷跡が癒えるには時間がかかるかもしれないが、両陛下の歌の如く、心安らぎ笑顔で過ごせる日々が戻り、未来輝く生活を過ごすことができますよう。今年のご愛読に感謝して、新年のご多幸を祈念しつつ。

主な内容　**2面**／第5回「観光まちづくりフォーラム」開催 地域がつながり、次世代につなげる「観光まちづくり」とは　**3面**／元寇から750年 特別展「海底に眠るモンゴル襲来」を開催
4・5面／奥深き明治期の政治史に迫る　**6・7面**／全国から応募総数1万5862点 高校生コンテスト入賞作品決定

最終面から K:DNA　**Ⅰ面**／箱根駅伝 エントリー選手発表

第5回「観光まちづくりフォーラム」開催

地域がつながり、次世代につなげる「観光まちづくり」とは

国学院大学観光まちづくり学部は11月6日、第5回「観光まちづくりフォーラム～持続可能な地域の実現に向けて～」を渋谷キャンパスで開催した。会場には自治体関係者ら約160人が集い、オンライン配信の視聴者も含め、「観光と交流」を軸とした活力あるまちづくりの実践に耳を傾けた。

第1部では針本正行学長のあいさつの後、来賓の（特非）全国町並み保存連盟事務局長の山本玲子氏が登壇し、「歴史的町並みの保存活動には多様な人材が必要。観光まちづくり学部の卒業生に大いに期待している」と述べた。続いて西村幸夫・同学部長（教授）は、1年次から学生が現場に出て地域課題に取り組むといった同学部の特長や近況を紹介した。

第2部は観光まちづくりに取り組む三つの地域の実践者を招き、シンポジウムが行われた。平成27（2015）年に「隠岐ユネスコ世界ジオパーク」に認定された島根県隠岐諸島の海士町で島のホテルを経営する（株）海士代表取締役の青山敦士氏は、古い国民宿舎を〝泊まれるジオパーク〟の拠点施設として再付加価値化した経緯を説明。「スタッフ65人のうち24人が移住者。人材の流動性をどう作っていくのかが課題」と述べた。

長野県小諸市にある（特非）こもろの杜の理事長で、まちづくりプランナーの荻原礼子氏は、古い商家の建物再生や住民主体の公園づくりといった取り組みを紹介。「ワークショップの中で住民の心の奥に眠っていたまちの〝自慢〟が次々に引き出された」と振り返った。

青森県八戸市の（有）髙森畳工店の取締役・髙森えりか氏は八戸市のB級グルメ「八戸せんべい汁」と漁港朝市のゆるキャラ「イカドン」を通じた地元PR活動について語り「個人や小さな団体の活動が地元の人々の心を動かし、郷土愛に革命をもたらした」とその成果を強調した。

次に司会の西村学部長やコーディネーターアシスタントを務めた小森谷咲希さん（観まち3）、古川楽人さん（同2）の質問に答える形で事例を紹介した3人と討議を行った。外部との人的交流が始まったことで地域の中に交流が生まれ、市民主体の活動に冷ややかだった役所側が次第に理解者になっていった実例などが語られた。一方、担い手育成や世代間の活動継承が課題に挙げられ、それに共感してうなずく参加者の姿も見られた。

学問ノ道　第65回

『國學院雜誌』の特集号

今年11月『國學院雜誌』は「創刊一三〇年記念特集　伝承文化研究の現在」として刊行され、針本正行学長による巻頭言に続き、16本の論考が掲載された。近年の『國學院雜誌』は毎年11月号を特集号としており、各研究分野における現在の課題と研究成果とを提示し、未来の研究の在り方までも問いかけている。

『國學院雜誌』における特集は、第12巻6号「本居春庭翁紀念号」（明治39〈1906〉年1月）を最初とする。当該年は春庭の『詞の八衢』の完成から100年にあたり、東京帝国大学内の言語学会で開催された講演筆記と論考12編が掲載された。このように『國學院雜誌』の特集は、国学者の事蹟顕彰にはじまっている。続く特集号は第14巻1号「朝鮮号」（明治41年1月）、第21巻1号「御大礼号」（大正4〈1915〉年9月）、第24巻11号「賀茂真淵翁百五十年祭記念号」（大正7年11月）と、不定期ながら、時制に即した特集が組まれている。そのため、歴史的出来事や作品成立の節目に合わせた特集も多い。特集によっては連続号となる場合もあり、昭和6〈1931〉年には、仮名遣改訂問題について第37巻9・10・11・12号と全4号にわたったこともあった。このほか、昭和15年11月「創立五十周年記念特輯神道文学研究号」（第46巻11号）、昭和26年10月「大学院開設記念号」（第52巻1号）などのように、大学の周年と重ねての特集もある。大学関連としては、昭和29年5月「折口信夫博士追悼号」（第55巻1号）以降、本学関係者の長寿を祝した特集号や追悼特集も散見される。そのほか本学関連としては、文部省の科研に採択されたことによる「熊野学術調査特集号」（第64号2・3号）「続熊野学術調査特集号」（第65巻10・11号）などもある。

現在のように、11月号を特集号とする契機となったのは、昭和39年11月「折口信夫博士十五年祭・武田祐吉博士十年祭記念特輯号」のようである。ときの佐藤謙三編集委員長は編集後記で「この特集を計画したわたくしどもの願いの一つは、若い学問好きの人たちが、これを足場にして両先生の業績をよりよく知り、より深く進めていくことである」と記している。つまり、年祭や追悼号も国学者顕彰の延長線上にあり、次世代の研究を志向させるためといえよう。

これ以降、追悼や別途特集が組まれ年間に複数回となることもあるが、基本的には11月号をもって特集号としている。今後も多様なテーマのもとに、未来を志向する特集が組まれていくことであろう。

研究開発推進機構准教授　渡邉卓

『國學院雜誌』第12巻6号「本居春庭翁紀念号」

公開学術講演会

災害時の神社の役割を考察

11月30日、国学院大学研究開発推進機構が主催する公開学術講演会が渋谷キャンパスで開催され、学生、神社関係者、そして一般の方など約110人が参加した。

今回は「現代社会と自然災害における神社」をテーマに、大阪大学大学院教授の稲場圭信氏**＝写真＝**を招き開催。稲場氏は、神社が地域社会のソーシャル・キャピタルとして機能し、能登半島地震や東日本大震災で避難所や支援拠点として活用された事例を報告。宗教者による支援は、災害発生当初における行政の支援の届きにくさを補うと重要性を強調。また有事に効果的な支援を行うためには、平時からの地域交流や神社・神職・氏子の結び付きの強化が不可欠であると語られた。

小池寿子氏に名誉教授の称号授与

国学院大学は、9月30日をもって退職した小池寿子氏（元文学部教授**＝写真**）に対して、10月1日付で名誉教授の称号を贈ることを決定した。

中根正人氏に博士の学位授与

国学院大学は中根正人氏（筑波技術大学職員**＝写真**）に博士（歴史学）の学位を授与することを決定した。12月4日、渋谷キャンパスで針本正行学長から学位記が贈られた。

中根氏の学位論文は『常陸大掾氏と中世後期の東国』。主査は矢部健太郎文学部教授、副査は佐々木倫朗・大正大学教授、堀越祐一・国学院大学北海道短期大学部教授。

新富士病院グループ本部と包括連携協定を締結

学校法人国学院大学（理事長：佐柳正三**＝写真右**）と一般社団法人新富士病院グループ本部（代表理事：中島一彦**＝同左**）は11月19日、学校法人全体の危機管理や地域の課題解決、人材育成等を図り、相互の発展に寄与することを目的とした包括的・継続的な連携に関する協定を締結した。

今後は、医療分野を中心にさまざまな事業で協力・連携を進める予定。

第7回オール国学院

親睦ソフトボール大会を開催

11月17日、第7回オール国学院親睦ソフトボール大会がたまプラーザキャンパスで開催された。快晴の下、学校法人国学院大学の設置校および学校法人国学院大学栃木学園の役教職員からなる7チームが参加し、熱戦を繰り広げた。

開会式では、佐柳正三理事長が「少子化という厳しい環境を乗り切るため、この大会を通じて各教育機関が相互に連携を深めてほしい」とあいさつ**＝写真**。佐柳理事長による始球式の後、大会は開幕した。選手たちは親交を深めながら合計10試合を戦い抜き、法人チーム（学校法人国学院大学役教職員他で構成）が優勝を飾った。

令和6年度文化講演会

師弟監督が駅伝を語る

令和6年度文化講演会「国学院×皇学館『駅伝師弟監督』対談」が11月24日に渋谷キャンパスで開催され、約200人が参加した。

前田康弘・国学院大学陸上競技部監督**＝写真左から2人目＝**と、その教え子で現在は皇學館大学駅伝競走部監督を務める寺田夏生氏（平25卒・122期健体**＝同左から3人目**）が登壇。講演では、選手との関わり方やチーム作りの重要性、スカウトの苦労など、多岐にわたる話題が2人の監督より語られた。最後に、前田監督は箱根駅伝、寺田監督は来年の全日本大学駅伝への抱負を語り、会場は参加者からの盛大な応援の拍手に包まれた。

令和6年度渋谷区民大学講座

変わりゆく日本語を解析

令和6年度渋谷区民大学講座「いま変わりつつある日本語―『ら抜き』『させていただく』などを解析する―」が11月23日に渋谷キャンパスで開催され、約90人が参加した。

この講座は渋谷区と国学院大学が結ぶ「Shibuya Social Action Partner（S-SAP）協定」に基づき、生涯学習支援の一環として実施している。

講師の菊地康人・文学部教授(特別専任) は、日本語が絶えず変化している現状に触れ、「ら抜き」言葉の仕組みや謙譲語の正しい使用方法などについて日本語学の視点から解説した。

「史学入門Ⅱ」特別授業

一関市民との交流イベントを実施

11月30日、文学部史学科基幹科目「史学入門Ⅱ」の特別授業として、岩手県一関市民との交流イベントが渋谷キャンパスで開催された。このイベントは、歴史地理学教室の吉田敏弘・文学部教授が長年行っている地域調査・交流事業の成果を学生に伝える目的で実施された。第1部では、一関市本寺地区神楽保存会による伝統的神楽「鶏舞」が実演された**＝写真**。第2部では、骨寺村小区画水田保存会による餅つき体験や餅・おにぎりの試食会を実施。第3部では、一関市の語り部や保存会の方々が、受講生に地域文化や中山間地域の課題について語った。

第3回法学会講演会

弁護士が実務で使う法律を学ぶ

第3回法学会講演会「弁護士に聞く～実際に使った、あの法律～」が11月28日に渋谷キャンパスで開催され、約40人の学生が参加した。今回は、講師として新宿清水法律事務所の森中晃一氏**＝写真右＝**と弁護士法人丸の内ソレイユ法律事務所の平野可菜氏**＝同左＝**の2人の弁護士が登壇。民法などの法律の条文が不動産取引や不貞行為慰謝料請求といった具体的な事例でどのように解釈・適用されるのか解説した。

元寇から750年

特別展「海底に眠るモンゴル襲来」を開催

モンゴル帝国（元）が日本侵攻を図った文永の役から今年で750年となり、国学院大学博物館は9月21日から11月24日まで特別展「文永の役750年 part・1 海底に眠るモンゴル襲来―水中考古学の世界―」を開催した。海底遺跡から発掘された「元寇」の証拠を一目見ようと多くの歴史ファンが足を運んだ。

長崎・佐賀県境の伊万里湾は、2度目のモンゴル襲来（弘安の役）で元軍の船が暴風雨で壊滅した海として知られる。同湾内の鷹島海底遺跡（長崎県松浦市）では1980年代から水中考古学的調査研究が進められており、平成23（2011）年と26年に池田榮史・研究開発推進機構教授の研究チームが2隻の軍船を発見した。

特別展では、見つかった鷹島1号・2号沈没船を復元した模型のほか、鎌倉時代の『蒙古襲来絵詞』に「てつはう」**＝写真左下＝**として描かれた炸裂弾や、パスパ文字（モンゴル帝国で用いられた文字）で「管軍総把印」と刻まれた銅印など、鷹島海底遺跡からの出土遺物が展示された。また、水中考古学の最新技術も紹介された。

関連イベントとして10月13日に池田教授による「ミュージアムトーク」が博物館内ホールで開かれた。池田教授は元軍船のいかりの向きから、船は強い南風にあおられたことが分かるなどと解説。さらに同11日に松浦市教育委員会が3隻目の沈没船確認を発表したことに触れ、「船が埋まっていそうな箇所はリストアップ済み。沈没船発見数を2桁まで伸ばしたい」と今後の調査への意欲を示した。

11月9日にはモンゴルの研究者5人を招いたシンポジウム「モンゴル人研究者から見たモンゴル襲来」が渋谷キャンパスで行われた**＝同上**。モンゴル国立科学アカデミー考古学研究所中世モンゴル帝国研究室長のソルバラム・フレルスヘ氏は鷹島海底遺跡で見つかったかぶとなどが、元時代のモンゴルの武具と非常に似ていると指摘。モンゴル国立大学人類学・考古学部長のウランバヤル・エルデネバト氏らは遊牧民の服飾文化を象徴するベルトに注目。飾りが銅製であることから階級の低い軍人のものだと解読。さらに、日本の水中考古学者との共同研究をいっそう進めていく必要性を強調した。

公開シンポジウム

古代伊勢斎宮の謎に迫る

国学院大学研究開発推進機構学術資料センター主催の公開シンポジウム「古代伊勢斎宮の歴史とまつり」が11月16日、渋谷キャンパスで開催された。学内外から多くの学生や研究者が訪れ、講演や討議に熱心に耳を傾けた。

斎宮とは天皇が都から伊勢に遣わした未婚の女性皇族である「斎王」の居所であり、現在の三重県明和町に位置した。国学院大学での斎宮関連シンポジウムは今回で3回目。昨年、奈良時代の正殿跡とみられる遺構が明らかになったことを契機に開催された。

最初に木村大樹・研究開発推進機構助教（特別専任）が「斎宮・斎王とは何か?」と題し、斎王の日常や祭祀などを説明した上で、斎王は伊勢において都の天皇と対比される存在であり、朝廷同様の生活や祭祀・行事の数々を執り行っていたことを解説した。

続いて報告1「古代伊勢斎王の宮殿の構造と変遷」として三重県教育委員会社会教育・文化財保護課係長の川部浩司氏**＝写真＝**が、最新の発掘調査に基づき、飛鳥時代、奈良時代それぞれの斎王宮殿域を説明。掘立柱跡などから導き出した正殿の想定図を示し、目隠塀を持つ建物が存在したことや、斎宮跡近くの北野遺跡辺りが、土師器の大生産地だったことを紹介した。

報告2「古代斎宮のまつりと伊勢神宮」では塩川哲朗・皇学館大学研究開発推進センター准教授が、『延喜斎宮式』などの文献を基に斎王と伊勢神宮の関係を発表。「正月元日」から始まる数々の節目の祭祀を示しながら「斎王祭祀は宮中祭祀や天皇祭祀と対応関係にあり、天照大神を遥拝祭祀することに本義がある」などと述べた。

二つの報告を受け、笹生衛・研究開発推進機構長（神道文化学部教授）が、斎宮の「目隠塀」を伴う建物遺構について「非常に大きな発見」とした上で、目隠塀が「その祭祀の場の本来の実態を伝えている可能性が高い」との見解を示した。

最後の討議では4人の登壇者が、斎宮で新嘗祭が行われた可能性や発掘調査の展望について意見を交わし、今後のさらなる発見に期待を寄せた。

研究者に聞く

奥深き明治期の政治史に迫る

法学部・坂本一登教授

西欧を規範とした近代国家の形成

今年度の大学の授業を始めるにあたって、最初のガイダンスで、「歴史は暗記ではありません。われわれがどこから来て、どこへ行くのかということを省察し、思いをはせることです」と話しました。われわれが無意識のうちにとる行動であったり、かっこいいと感じたり、こうすべきだと判断する規範や意識は、自然に成立したものではなく、歴史のある時点で形作られた歴史的産物です。そして、今という時代を考える上で、私にとって興味深いのは、現在につながる一大転換期としての近代――つまり、近代国家が形作られた時代です。

まずは大きな視点からお話ししてみたいと思います。西洋史に「長い19世紀」という概念があります。もともとはイギリスの歴史家であるエリック・ホブズボームが提唱したものです。その後、「長い19世紀」の始期をアメリカ革命（アメリカ独立革命）が始まった1760年代に求めるか、フランス革命が起こった1780年代とするか、研究者によって意見は分かれていますが、いずれにせよ終わるのは第一次世界大戦、というのが共通理解です。私が「近代」という言葉でイメージしているのも、この「長い19世紀」という時代です。

さて、その近代という時代は、中央集権的な近代国家が形成され、その近代国家を中心に世界が相互に結びつきを強めて一つになっていく時代だと言うことができます。18世紀までは、中国とかインドとかイスラムとか個々の文明圏というものは相対的に自律していて、薄いつながりを持ちつつも併存していた。それが19世紀を迎え、近代に突入していくにあたって、世界は一つに結び付いていきます。その推進力となったのが圧倒的な軍事力と経済力とイデオロギー力を持つ西欧文明であり、西欧を中心に世界が一つに統合されていく中で、西欧の在り方が世界の共通性、規範性となり、「世界史」という歴史のありようも形成されていきました。

西欧を普遍的なモデル、いわば模範とするような認識が広がっていく一方、他方でそうした西欧中心の世界観の拡大に抵抗を感じて、自分のアイデンティティーを模索し、自国への帰属意識を高めながら西欧に対抗しようとする動きも、各国で生まれていきます。これがナショナリズムですね。こうした双方の動きの交錯と葛藤が、政治的なダイナミクスを生み出し、世界史を動かしていく。その渦中に、日本の近代もありました。私たちが今送っている社会の日常や現代の政治の在り方に連なる、明と暗の両面を含む日本の近代の物語はどのように紡がれていったのか。特にその起点となった明治期の政治史に、興味を引かれ、研究を進めています。

日本近代史への転機

他方で、私が明治期の政治に興味をもつに至るまでには、多少の紆余曲折がありました。大学に入った頃は、法学部なので将来的には司法試験に挑戦してみようかと漠然と考えていました。しかし、これは歴史の偶然なのですが、入学して最初に受けたある先生の民法総則の授業が絶望的につまらなくて、一夜にして法律学への興味を失いました（笑）。恐らく学ぶ資質がなかったのだと思います。それで、どうしようかと思いながら、しばらくは人並みに自分探しに明け暮れました。その過程では自分でもよくわからない自責の念と素朴な正義感にかられて、スモン病訴訟の原告団に入り浸り、ほとんど大学に行かない時期もありました。当時の厚生省の前で原告の車いすを押してデモをしたこともあります。ただ、東京地裁の勝訴判決が出て一区切りついた時、無性に勉強がしたくなって大学に戻りました。

その頃は、ミシェル・フーコーとか、レヴィ・ストロースとか、ロラン・バルトとか、構造主義とかポストモダンとかいったフランス現代思想が流行していて、何も分からないまま（今も分かっていませんが）知的ファッションとしてそれらに染まりました。と同時に、フランスつながりで澁澤龍彦をはじめとして「怪しげ」な文学評論にもかぶれ、そしてエラスムスやフランソワ・ラブレーなどの、フランス系のユマニスト（人文主義者）たちの作品にも出会い、人間とか社会について考えることの面白さを感じ始めていました。もっとも、人間の不思議さや社会の精妙な複雑さに驚きつつ、幼稚なことをあれこれ夢想していたにすぎませんが。

そんなまとまらぬ思いを抱え、4年生の春、当時授業で好きだった政治学の先生のところへ大学院進学の相談に行きました。西洋政治思想史としてフランス人文主義などどうでしょうかと恐る恐る尋ねると、「あなた、ラテン語はどれくらいお読みになれますか」と聞かれ、ラテン語のラも知らなかった私は、その一言に驚愕し撃沈されました（笑）。

続けて、研究したいのなら「西洋のことよりも、日本のことのほうがやるべきことはたくさんある」、特に日本近代史はまだまだ開拓の余地がある、とも話されました。「日本には良い歴史家が少ない。良い社会とは、良い歴史家が多くいる社会だ」といったようなことも言われました。良い歴史家になれる自信は全くありませんでしたが、がぜん日本近代史に興味がわいてきました。文化人類学などに少し触れて、西洋近代のパラダイムを相対化し、批判的に検討する知的雰囲気になんとなく感化されていたことも、それらの言葉を受け止める背景になったのかもしれません。

このように、偶然も重なり、遅まきながら私は日本近代の政治史を研究する道を歩むことになりました。西洋近代との交錯と葛藤（かっとう）という視点から、日本の歴史を遡（さかのぼ）っていくと幕末明治期に突き当たります。その時代を見つめることは、自分たちの社会を振り返り、ひいては日本近代の物語を多角的に検討することにつながるのではないかと思っています。

さかもと・かずと
法学博士。専門は日本政治史。主な著書に、共著書・山口輝臣／福家崇洋編『思想史講義【明治篇Ⅱ】』（2023年、筑摩書房）、『岩倉具視：幕末維新期の調停者』（2018年、山川出版社）など。

政治史のアクターとしての明治天皇

私は政治史の研究者ですので、当然、専門家の方々と一緒に研究しているわけです。ただ、ものを書くときは、なるだけ専門家だけではなく、一般の読書好きの人にも興味を持ってもらえるように書ければいいなあと思ってやってきました。「専門」家ではない、門外漢の人にも、啓発的とまでは言えないにしても、できれば歴史は面白いと思ってもらえるような、そんなリーダブルな物語や人間ドラマを書きたいと思ってきました。恐らくそれは、大学院時代に、歴史は物語であり、面白くなければならないという独断と偏見を、ひどく刷り込まれたせいだと思います。もっともそれは、呪いの言葉でもあって、何事もそうですが、言うは易く行うのは難しいので、低い生産性にいつも悩んでいます。ですから、ほんのたまにですが、リップサービスで歴史って興味深いですねとおっしゃってくださる読者に出会うと、我を忘れます（笑）。

さて、「長い前置き」はこのくらいにして、研究の内容に移りたいと思います。

『伊藤博文と明治国家形成―「宮中」の制度化と立憲制の導入』（1991年、吉川弘文館。のちに2012年、講談社学術文庫）という私の著書は、当時はあまり評価の高くなかった伊藤博文を中心に、伊藤を再評価しながら明治国家の形成史を描いたものです。が、同時に、もう一人の主人公として、明治天皇を登場させて叙述したところが、当時としては多少目新しい点だったかと思います。天皇制という言葉は、批判的なニュアンスを込めて、それこそ枕詞のように使用されていましたが、不思議なことに明治天皇が政治史の中で存在感をもって描かれることは、資料上の問題もあって、ほとんどなかったのです。

制度上の存在ではなく、明治国家形成史の重要なアクターの一人として、生身の人間としての明治天皇を組み込んで政治史を描くということですね。明治天皇は、維新の際、17歳でした。錯綜（さくそう）した政治情勢に翻弄され、当惑しながら複雑な気持ちをいだいて即位したと思います。それゆえ、明治政府との関係も、当初は必ずしも順調だったわけではなく、言葉を選ばずに言えば、政府関係者の嘆息の対象になったこともありました。

実際、国家形成が本格化する明治10年代後半には、何度も政府関係者と天皇との間に衝突が生じています。外務卿が外国交際を推進するため外国要人との面談を天皇に要請しても拒否されたり、海軍の重要なイベントに天皇の出席をお願いしても「炎暑」を理由に拒絶されたり。その背景には、外国嫌い・外出嫌いの天皇と強引にことを進めようとする政府関係者との間のコミュニケーション不足に由来する相互不信がありました。

明治国家の形成というのは、外国の憲法や制度を学習していかに日本に導入するかという問題だけでなく、君主である明治天皇と政府との間にいかに信頼関係を生み出していくかという問題も重要だったのです。そして天皇との信頼関係を成り立たせる上で、伊藤の果たした役割は大きかったと思います。またいったん伊藤を仲介に相互信頼が生まれると、明治天皇も人が変わったように人間としても立憲君主としても成長していきます。明治天皇の君主としての成長と、明治という時代の成長が、同時代を生きた人々には、一つに重なり合い、分かちがたいもののように感じられたのかもしれません。だからこそ、明治天皇の死は一人の君主の死以上の喪失感をもたらしたのではないでしょうか。

明治の指導者たちの知的格闘

明治国家形成に関して、もう一つ長い間取り組んできた問題に、明治憲法の制定があります。これについても話せば長くなるので、ここでは、伊藤博文の名前で公刊された『憲法義解』（2019年、岩波書店）で私が執筆した解説のさわりを紹介しておきます。

「明治憲法は、かつて不磨の大典と呼ばれた。その語感は、憲法が確乎として統一された構想の下に制定されたことを連想させる。また、人によっては、統一された構想ということから、明治一四年政変でプロイセン型立憲政体の採用が決定され、ドイツモデルに基づいて粛々と憲法が制定されたイメージを想起するかもしれない。しかし、明治憲法の制定過程は、決してそのような単純なものでも、予定調和的なものでもなかった。

非西欧世界で初めて本格的に立憲政治を導入するにあたって、憲法をいかに制定すれば、安定と成果を得られるかという問いは、誰にとっても見透しがたく答えるのが難しい問題であった。そして、そうした不確実性に対応して、当時の藩閥政府内には、憲法や立憲政治についてさまざまな考え方や構想が存在し、それらの間の相克を反映して、憲法条文と条文の『説明』を確定する作業は、思いのほか紆余曲折をたどったのである」『憲法義解』の本当の著者は、伊藤ではなくて、井上毅（こわし）です。そして、明治憲法の原案をつくり、制定作業を主導していったのも、井上毅でした。その井上毅が憲法草案を作成する過程で、調査したり、推敲（すいこう）したり、議論したりした、貴重な原資料が、実は国学院大学の図書館に寄贈されています。一般的には明治憲法は、今でもあまり良い憲法ではないという印象をお持ちの方が多いのかもしれません。しかし、それらの資料を見ていると、恐らく歴史の法廷に立たされることを自覚していた、一般に憲法制定者たちと呼ばれる井上や伊藤および伊東巳代治、金子堅太郎らが、歴史への弁明を試みるかのように、文明的な憲法を目指して、彼らなりにいかに悩み、苦しみ、対立したか、それらの奮闘の軌跡が墨痕の間から浮かび上がってくるような気がします。

近年は、多少時期をずらして、明治憲法体制の行方といった漠然としたテーマで、明治憲法体制がどのように展開し、変容していくのかを研究しています。以前に比べれば、人物よりも構造の方に関心の比重が移っているかもしれません。昨年「第1次西園寺内閣と政友会―『与党システム』の誕生と議会審議の政治資源化」という論文を書いてみました。日本近代史の政党研究にはぶ厚い蓄積がありますが、意外と帝国議会と政治との関係を直接扱ったものは多くなかったからです。現代にまでつながる日本の議会運営の特色は、内閣と政党と議会との間の独特の関係にあるのではないかというのがその見通しですが、まだ試行錯誤の段階に過ぎません。本格的に大衆社会が到来したとき、帝国議会がどのように対応した（あるいはしなかった）のかという問題にも興味があります。

資料に基づいて新しい歴史的事実を発見することをファクト・ファインディングといいます。歴史はファクト・ファインディングに始まりファクト・ファインディングに終わるとも言われます。問題は、そのファクト・ファインディングに、どのような意味があるかということでしょう。資料を読めば自動的に新しい歴史的事実が発見されるわけではなく、ファクト・ファインディングの前には、必ず問いがあります。ですから意味あるファクト・ファインディングを行うということは、意味のある問いを立てることができるかどうかにかかっています。どうすれば意味のある問いを立てられるのか、どんな問いに意味があるのか、難しい問題ですが、われわれはどこから来てどこへ行くのか、それらを探るべく、研究を続けていきたいと思います。

全国から応募総数1万5862点

高校生コンテスト入賞作品決定

国学院大学とスクールパートナーズ（高校生新聞社）による第28回全国高校生創作コンテスト（協賛：国学院大学院友会・国学院大学若木育成会・国学院大学北海道短期大学部、後援：文部科学省・農林水産省・全国高等学校長協会・全国高等学校国語教育研究連合会・日本進路指導協会）と、第20回「地域の伝承文化に学ぶ」コンテスト（協賛：国学院大学若木育成会・国学院大学院友会・国学院大学北海道短期大学部、後援：文部科学省・農林水産省・全国高等学校長協会・日本進路指導協会）の入賞作品が決まり、12月8日に渋谷キャンパスで表彰式が行われた。両コンテストには全国の高校生から合わせて1万5862点の応募があった。※両コンテストの各部門の最優秀作品は本紙令和7年2月号に掲載予定

第28回全国高校生創作コンテスト

文部科学大臣賞に慶応義塾湘南藤沢高等部（神奈川）

全国高校生創作コンテストは、創作活動を通じて文章を書く喜び、ものを作り出す苦しさ、自分の考えを言葉として表現する難しさを感じながら、美しい日本語の再発見と学修を目的として平成9（1997）年から開催されている全国規模のコンテスト。今回で28回目を迎え、全国の高校生から1万5728点の応募があった。内訳は、短篇小説の部7769点▼現代詩の部8555点▼短歌の部5876点▼俳句の部8228点。

審査の結果、最優秀学校賞の文部科学大臣賞に慶応義塾湘南藤沢高等部（神奈川）、特別学校賞に灘高（兵庫）が選ばれ、短篇小説部門で最優秀賞を受賞した黒須さくらさん（東京・三鷹中等教育学校3年）の「あるく桜前線」をはじめ各部門の最優秀賞、優秀賞も**別表**のように決まった。

表彰式では石川則夫副学長のあいさつと若木育成会・都司掛司会長の祝辞が代読され、院友会・川津浩一常務理事代行事務局長が来賓として登壇し受賞者を激励した。また、審査員から部門ごとに講評が伝えられた。佳作は次の通り。（敬称略）

短篇小説の部

【佳作】「魔法の指」藤井あかり（島根・松江南高2年）▼「だいだらぼっち」兪鑽欣（千葉・渋谷教育学園幕張高1年）▼「星々と漫才」山田ひなの（愛知・時習館高2年）▼「100ひく7」吉田翔梧（神奈川・慶応義塾高3年）▼「アクアリウムという星の下で眠る」香川陽菜（神奈川・横浜サイエンスフロンティア高3年）

現代詩の部

【佳作】「空蟬」阿部花恋（愛媛・今治西高2年）▼「もやもや」島田道峻（東京・海城高2年）▼「なかよしクラブ」山口莉緒（広島・AICJ高2年）▼「合唱」西川まい（東京・白百合学園高2年）▼「空色の夢」馬場瑛大（京都・西城陽高2年）

短歌の部

【佳作】佐藤日和（宮城・常盤木学園高2年）▼春山天（山形・致道館高3年）▼大関郁匠（北海道・登別青嶺高3年）▼岸本華（沖縄・名護高3年）▼森口夕理香（東京・渋谷教育学園渋谷高2年）

俳句の部

【佳作】武藤理央（群馬・高崎女子高1年）▼原田晋之介（長崎・長崎南山高3年）▼塚本凛（埼玉・浦和第一女子高2年）▼本田七菜（熊本・熊本高3年）▼西森結海（大阪・関西大学第一高2年）

【審査員＝敬称略】中村航（作家）▼井上孝雄（東京都立高教諭）▼水無田気流（詩人・本学経済学部教授）▼田中章義（歌人）▼堀本裕樹（俳人）▼村田勝利（高校生新聞社代表取締役社長）

文部科学大臣賞
慶応義塾湘南藤沢高等部（神奈川）

特別学校賞
灘高（兵庫）

短篇小説の部

最優秀賞	「あるく桜前線」黒須さくら（東京・三鷹中等教育学校3年）
優秀賞	「正しい線の引き方」佐々木由宇（東京・南多摩中等教育学校1年）
	「いさしかぶり！」瀬戸ことね（神奈川・聖園女学院高1年）

現代詩の部

最優秀賞	「喋らない青年と喋れない老人」田中理紗子（スイス・Institut auf dem Rosenberg2年）
優秀賞	「あたし、17歳」西寺芙美加（埼玉・大宮国際中等教育学校2年）
	「プールルーム」佐藤柚花（愛知・同朋高3年）

短歌の部

最優秀賞	川畑陽平（福岡・西日本短期大学附属高3年）
優秀賞	森翔吾（岐阜・関高2年）
	廣瀬天音（茨城・茨城高3年）

俳句の部

最優秀賞	伊佐綾乃（沖縄・興南高2年）
優秀賞	酒井瑞生（東京・立川高1年）
	柳井仁（神奈川・慶応義塾湘南藤沢高等部2年）

高校生向けコンテスト
「入賞作品集」を制作中

今回のコンテスト入賞作品を掲載した「全国高校生創作コンテスト入賞作品集」「『地域の伝承文化に学ぶ』コンテスト入賞作品集」を来年2月下旬に刊行の予定です。両作品集はお一人様2部まで、無料配布いたします。発送をご希望の場合は、希望部数と送付先を下記までご連絡ください。

問高校生新聞社コンテスト事務局（☎042・724・2750）

最優秀賞受賞者 喜びの声

短篇小説の部
黒須さくらさん（東京・三鷹中等教育学校）
まさか賞をいただけるとは思ってもいなかったので、結果を聞いた時はとても驚きました。私自身、小説のコンテストに挑戦することも、受賞することも初めてで実感が湧かないのですが、私の作品が自に留まり、最後までお付き合いいただいたこと、とてもうれしく思います。この場をお借りして感謝申し上げます。

現代詩の部
田中理紗子さん（スイス・Institut auf dem Rosenberg）
作品に隅々まで目を通してくださった審査員の方々に御礼申し上げます。この受賞は私のものだけではなく、これまで支えてくださった両親や先生方のものだと考えています。そのためこの受賞を報告できることをとてもうれしく思います。

短歌の部
川畑陽平さん（福岡・西日本短期大学附属高）
このような大きな賞をいただき、ありがとうございました。短歌で最優秀賞をいただいたことを先生から聞いた時はとても驚きました。短歌は素直な気持ちをそのまま詠むことができるので、私自身が抱いた素直な思いを表現するように心がけました。

俳句の部
伊佐綾乃さん（沖縄・興南高）
この度はこのような素敵なコンテストで賞をいただけたこと、感謝の気持ちでいっぱいです。初めての受賞ということもあり、まだ実感が湧いていませんが、この賞を励みにこれからも日々創作を続けていこうと思います。本当にありがとうございます。

地域文化研究部門（団体）
徳島・池田高探究科 農具班（代表・阿部理子さん）
農業というものは身近にあり過ぎて、傾斜地農業も同じような感じだろうと考えていました。ですが先輩方の先行研究や大学の先生などの研究を見る中で、農業を新しい視点で見ているところにとても魅力を感じました。研究を通してもう一度自分の地域の魅力を発見してみようと思いこの研究に取り組みはじめました。これまで取り組んできた成果が、最優秀賞という形で得られたのは本当にうれしいです。

地域文化研究部門（個人）
戸田武瑠さん（千葉・長生高）
私が住む山辺地区の講の行事で立てられていた卒塔婆を不思議に思い、インターネットで調べたところ子安講の宗教行事だということがわかり、自分の住む地域の講に興味を持ちました。図書館などで調べましたが、文献資料が少なく、聞き取り調査によって講の現状を明らかにしようと思い調査を始めました。地元の方々や学校の先生、家族などさまざまな方のご厚意で成し得た調査だと思うので、お世話になった方々に感謝の気持ちを伝えたいです。

地域民話研究部門（団体）
愛媛・松山北高郷土研究部（代表・森貞裕太郎さん）
4年連続で最優秀賞をいただけるとは思っていなかったため光栄に感じています。今年度から全く新しいテーマで研究を始めるにあたって、論点がずれないよう部内で注意して研究を行いました。論点を明確にすることでレポートにまとめる際、手際よく進み、研究としても充実したものになったと思います。

地域民話研究部門（個人）
渡邉正太郎さん（静岡・富士高）
とてもうれしいです。今年も最優秀賞をいただけるとは思っていなかったので驚きました。先行研究がほとんど残っていない中で、民話、石造文化財、絵地図などのさまざまな性質の史資料を組み合わせて読み解いていく力が成長したと感じました。

第20回「地域の伝承文化に学ぶ」コンテスト

折口信夫賞に戸田武瑠さん（千葉・長生高）

「地域の伝承文化に学ぶ」コンテストは、地域に伝わる伝説や昔話、行事、方言、郷土料理など高校生が「身近な地域社会」に目を向け、連綿と伝わる地域の文化に向き合ってもらうことを目的として開催している。また、本学が有する伝承文化に関する資産に触れることで研究を深めてもらうことも狙いとする。20回目を迎えた今回は全国から134点の応募があった。内訳は、地域文化研究部門が団体24点・個人66点▼地域民話研究部門が団体6点・個人35点▼学校活動部門が3点。

最も優れた研究に贈られる折口信夫賞に地域文化研究部門（個人）最優秀賞の「千葉県大網白里市山辺地区における講の現状」戸田武瑠さん（千葉・長生高2年）が選ばれたほか、各部門の最優秀賞、優秀賞が**別表**（敬称略）のように決まった。

表彰式では石川則夫副学長のあいさつ（代読）と若木育成会・都司掛司会長（代読）、川津浩一常務理事代行事務局長の来賓祝辞が送られた後、各部門最優秀賞の受賞者が研究内容を発表した。佳作は次の通り。（敬称略）

地域文化研究部門（団体）
【佳作】「明日香村の民俗」（奈良・帝塚山高地理歴史部）▼「抜けた乳歯の扱い方とその風習」（茨城・土浦日本大学高民俗信仰研究チーム）

地域文化研究部門（個人）
【佳作】「伝統芸能祭りから紐解くジェンダー平等への明るい未来」南部夏歩（長崎・長崎東高1年）▼「糸満ハーレーの歴史的背景と文化的意義」大城佳珠帆（沖縄・昭和薬科大学附属高3年）

地域民話研究部門（団体）
【佳作】「続・紀南地域における河童伝承～河童の正体に迫る～」（和歌山・田辺高河童倶楽部）

地域民話研究部門（個人）
【佳作】「龍口法難の伝説―繋いだ日蓮の歩み―」小島未心子（神奈川・鎌倉女子大学高等部2年）▼「深谷城にまつわる釣鐘池の伝説」横山響来（埼玉・本庄高2年）

【審査員＝敬称略】小川直之（本学名誉教授）▼大石泰夫（本学文学部教授）▼八木橋伸浩（玉川大学リベラルアーツ学部名誉教授）▼伊藤龍平（本学文学部教授）▼飯倉義之（本学文学部教授）▼高橋大助（本学文学部教授）▼服部比呂美（本学文学部教授）

主催者あいさつ・祝辞（要旨）

【地域の伝承文化に学ぶ】コンテスト
【主催者あいさつ】
石川則夫副学長
文化とは、一人一人の生活様式や地域の伝承行事そのもの。地域に根付いた行事や信仰を新鮮な視点で考察した力作が多く集まった。本コンテストを契機として、長年にわたり継続されてきたこの日本文化の特質を現代社会や海外へ広く発信し続けてもらいたい。

【祝辞】
若木育成会・都司掛司会長
受賞者の調査・研究成果が源泉となって、地域の活性化や魅力度の向上につながることが期待されている。ため「地域の伝承文化に学ぶ」ことには大きな意義がある。今後も、地域の貴重な財産となる成果を創出する取り組みが継続されることを願っている。

【祝辞】
院友会・川津浩一常務理事代行事務局長
いずれの受賞作品からも、受賞者が住む地域の伝統や文化を大切する気持ちや、それを次世代に継承しなくてはならないという強いメッセージを感じた。地域の伝統や文化にとどまらず、日本の美しい伝統や文化をこれからも大切に守り続けてほしい。

折口信夫賞
「千葉県大網白里市山辺地区における講の現状」戸田武瑠（千葉・長生高2年）

地域文化研究部門

団体	
最優秀賞	「世界が認めた生きる遺産 ～傾斜での農業を可能にした農具～」（徳島・池田高　探究科 農具班）
優秀賞	「みのかも定住自立圏・高校生聞き書きプロジェクトの報告」（岐阜・関高　地域研究部・文芸部）
	「地獄の釜の蓋が開く日～釜の蓋まんじゅうに関する考察～」（栃木・矢板東高　リベラルアーツ同好会）
個人	
最優秀賞	「千葉県大網白里市山辺地区における講の現状」戸田武瑠（千葉・長生高2年）
優秀賞	「上三原田の歌舞伎舞台～上三原田の天才が造りだした日の本一の廻り舞台～」嶋原泉（群馬・東京農業大学第二高3年）
	「学生のボランティアと運営参画から見た湘南ひらつか七夕まつりの継承」石原深生（東京・渋谷教育学園渋谷高2年）

地域民話研究部門

団体	
最優秀賞	「松山平野南部の伝承調査～河童・大森彦七・落武者の里の謎を解く～」（愛媛・松山北高　郷土研究部）
優秀賞	「和泉地区発・青葉の笛をつなぐ２～義平と おみつ 乱世に咲いた恋～」（福井・大野高　JRC「結」）
個人	
最優秀賞	「駿河国富士郡入山瀬村の旧字の考察―旧字からみた入山瀬村―」渡邉正太郎（静岡・富士高2年）
優秀賞	「伝説と信仰の里　松岡集落の阿黒王伝説～阿黒王は本当に悪者だったのか～」佐々木ゆら（秋田・湯沢高3年）

学校活動部門

優秀賞	「伝統食「すこ」を未来へつなぐ～八つ頭芋茎をシン・ふるさと銘菓　スコーンに～」（福井・大野高　JRC「結」）

インフォダイジェスト

肉内容　日日にち　時時間　場場所　対対象　定定員　料料金　申申し込み　問問い合わせ
…在学生　…保証人　…卒業生　…一般　…受験生

大学からのお知らせ

年末年始の事務休止

肉12月24日㈫から令和7年1月4日㈯まで、渋谷・たまプラーザの全事務室は閉室となります。同期間中は、証明書自動発行機の利用もできません。授業開始は1月6日㈪です。

令和7年度大学院春季入学試験

肉国学院大学大学院博士前期課程および同後期課程では、令和7年度春季入学試験を実施します。日程の詳細は本学HP（**二次元コード**）からご確認ください。

問大学院事務課（☎03・5466・0142）

令和7年度国内外派遣研究員

肉国学院大学の令和7年度国内および国外派遣研究員が決定しました。詳細は本学HP（**二次元コード**）からご確認ください。

問人事課（☎03・5466・0105）

大学入学試験に伴う入校制限

肉令和7年度大学入学共通テストおよび本学一般選抜入学試験実施のため、会場となるキャンパスへの入校を**別表**の通りに制限します。なお、該当期間は課外活動を行うことができません。

◆**大学入学共通テスト**

	日	時	立入制限区域など
渋谷キャンパス	1月17日㈮ 入学試験準備日	終日	若木会館、百周年記念館（地下２階、４階）
		16時10分以降	130周年記念5号館
		19時30分以降	120周年記念1号館、120周年記念2号館
		21時以降	3号館、総合学修館（6号館）
	1月18日㈯・19日㈰	終日	若木タワー、120周年記念1・2号館、3号館、130周年記念5号館、総合学修館（6号館）、若木会館、百周年記念館（地下2階、4階）

※学術メディアセンター、百周年記念館（地下1階、1～3階）、国際交流センターは立入制限区域ではありません。
※1月17日㈮17時から19日㈰まで国際交流センターと院友会館の通用門は封鎖

◆**本学一般選抜入学試験**

		日	時	立入制限区域など
渋谷キャンパス	A日程	2月1日㈯ 入学試験準備日	終日	120周年記念1・2号館、3号館、130周年記念5号館、若木会館、百周年記念館（地下2階、4階）
			17時以降	総合学修館（6号館）
			19時30分以降	学術メディアセンター
		2月2日㈰～4日㈫ 入学試験当日	終日	若木タワー、120周年記念1・2号館、3号館、130周年記念5号館、総合学修館（6号館）、百周年記念館（地下2階、4階）、学術メディアセンター（博物館を除く）、若木会館
	B日程	3月1日㈯ 入学試験準備日	終日	120周年記念1・2号館、3号館、130周年記念5号館、若木会館、百周年記念館（地下2階、4階）
			17時以降	総合学修館（6号館）
			19時30分以降	学術メディアセンター
		3月2日㈰ 入学試験当日	終日	若木タワー、120周年記念1・2号館、3号館、130周年記念5号館、総合学修館（6号館）、百周年記念館（地下2階、4階）、学術メディアセンター（博物館を除く）、若木会館

※2月1日㈯17時～4日㈫、3月1日㈯17時～2日㈰：国際交流センターと院友会館の通用門は封鎖
※博物館の開館日は、博物館HPをご確認ください。

	日	時	立入制限区域など
たまプラーザキャンパス A日程	2月1日㈯ 入学試験準備日	14時以降	1・2・3・5号館、Sports Square1・3、若木21
	2月2日㈰～4日㈫ 入学試験当日	終日	
B日程	3月1日㈯ 入学試験準備日	14時以降	1・2・3・5号館、Sports Square1・3、若木21
	3月2日㈰ 入学試験当日	終日	

キャリアサポート

※詳細確認・申し込みはK-SMAPYⅡから行ってください

①就活Reスタート講座・②第3回求人フェア

肉①これからの就職活動の進め方や考え方、この時期の優良企業との出会い方、これからのサポートの活用方法などをお伝えします。②ハローワークや専門の人材紹介企業による求人紹介を行います。
日1月8日㈬①11時～11時45分②13時～16時10分
場①オンライン②渋谷キャンパス6号館地下1階
対4年生

K:DNA

2024 12

K:DNA ── 創立143年を迎えた国学院大学の遺伝子…個人・個性を尊重する校風　若いエネルギーが未来を変える

陸上競技部

箱根駅伝 エントリー選手発表

令和7年1月2、3日に開催される第101回東京箱根間往復大学駅伝競走（箱根駅伝）に出場する全21チームのエントリー選手が12月10日、関東学生陸上競技連盟から発表された。国学院大学陸上競技部のエントリー選手16人と大会への意気込みを紹介する。 1面に関連記事

エントリー選手

平林　清澄（経営4）

「歴史を変える挑戦」のスローガンのもと、他大学のエースに勝ち切り、区間賞を取る走りで箱根駅伝総合優勝できるように全力で戦います。

佐藤　快成（健体4）

箱根駅伝は中学生の頃からの目標でした。任された区間で区間賞を取り、チームの優勝に貢献できるように強みの粘りの走りで頑張ります。

鶴　元太（史4）

これまでやってきた4年間の集大成を出せる走りをします。自分のベストを出し、チームの総合優勝に向け、貢献できる走りをします。

中川　雄太（健体4）

最初で最後の箱根駅伝、今までけがに悩まされ、悔しい思いをしてきた気持ちを力に変えて強気の走りでチームの総合優勝に貢献します。

山本　歩夢（健体4）

この1年でメンタルと速いペースで勝負が仕掛けられるように成長できたと思います。区間賞の走りを見せ、最後に笑って終えられるよう頑張ります。

青木　瑠郁（健体3）

次期エースとして、優勝を決定づけるような区間賞・区間新記録の走りをし、このチームで大学三大駅伝3冠を達成したいです。

上原　琉翔（健体3）

この1年間箱根駅伝総合優勝を目標に頑張ってきました。大学三大駅伝ラスト1戦、優勝できるように個人としても区間新を狙って頑張ります。

嘉数　純平（健体3）

区間賞を取ってチームを勢いづけられる走りをし、ここまでやってきた練習の成果が発揮できるように総合優勝を目指して頑張ります。

高山　豪起（法3）

この1年でレースで勝ち切ることができるようになりました。過去2年、思うような走りができなかったので、今回は優勝に貢献できる走りをします。

後村　光星（健体2）

出雲駅伝、全日本大学駅伝と登録メンバーには入ったものの当日出走することがかなわなかったので、箱根駅伝ではチームに貢献できる走りをします。

辻原　輝（史2）

箱根駅伝のコース上で生まれ育った自分にとって、箱根駅伝は最も思い入れの強い大会。箱根で最高の走りができるように1年間取り組んできました。

野中　恒亨（健体2）

総合優勝を目標にここまでやってきた自分たちの思いを1本のたすきに込めて走ります。攻めの走りで総合優勝目指して頑張ります。

吉田　蔵之介（経2）

今年1年間はけがに苦しみ、なかなか思うように走れない期間がありました。その悔しさを箱根駅伝にぶつけ、区間賞を取りにいきます。

飯國　新太（法1）

4年生を中心としたお世話になった先輩方とともに、優勝するために自分ができる最大限の走りをして区間賞を狙って頑張りたいです。

岡村　享一（経営1）

前半シーズンにけがの影響で試合に出られなかった自分を支えてくれた家族や監督、先輩方に走りで恩返しができるように頑張ります。

尾熊　迅斗（健体1）

箱根駅伝は自分にとって今回初めてになるので、出走がかなったら1年生らしい積極的な走りをしてチームの勝利に貢献したいです。

沿道での観戦・応援に関する注意事項

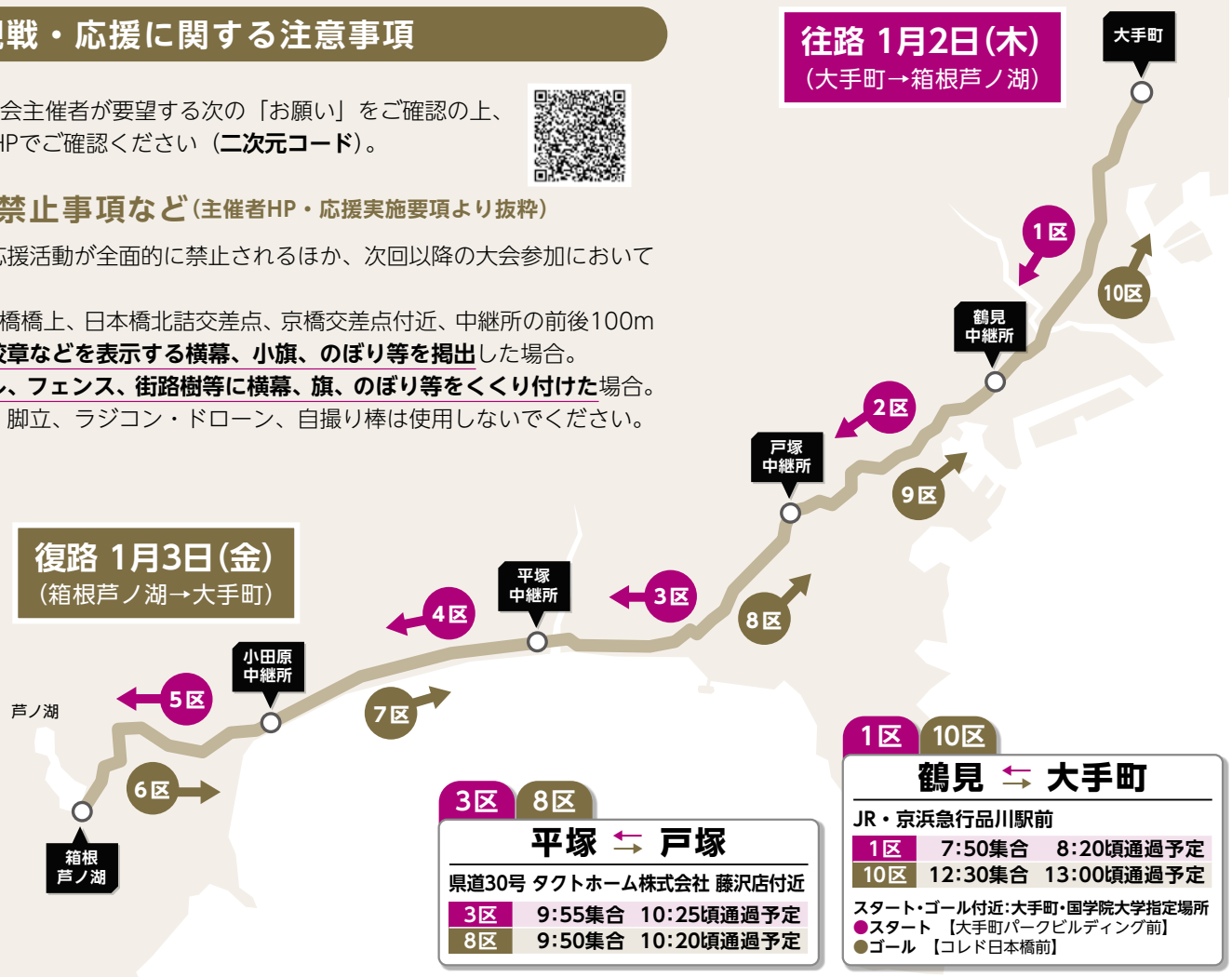
箱根駅伝の観戦・応援にあたっては、大会主催者が要望する次の「お願い」をご確認の上、順守してください。最新の内容は主催者HPでご確認ください（**二次元コード**）。

沿道での観戦・応援に関する禁止事項など（主催者HP・応援実施要項より抜粋）

以下の行為が確認された場合、以後の応援活動が全面的に禁止されるほか、次回以降の大会参加において応援活動が制限される場合があります。

- スタート地点、フィニッシュ地点、日本橋橋上、日本橋北詰交差点、京橋交差点付近、中継所の前後100m以内での**校旗、部旗、大学名あるいは校章などを表示する横幕、小旗、のぼり等を掲出**した場合。
- 沿道の公共物である**電柱やガードレール、フェンス、街路樹等に横幕、旗、のぼり等をくくり付けた**場合。

※小旗やのぼりの掲出は可能な限り控え、脚立、ラジコン・ドローン、自撮り棒は使用しないでください。



1区 10区　鶴見 ⇆ 大手町

JR・京浜急行品川駅前

1区	7:50集合	8:20頃通過予定
10区	12:30集合	13:00頃通過予定

スタート・ゴール付近：大手町・国学院大学指定場所
●スタート　【大手町パークビルディング前】
●ゴール　【コレド日本橋前】

3区 8区　平塚 ⇆ 戸塚

県道30号 タクトホーム株式会社 藤沢店付近

3区	9:55集合	10:25頃通過予定
8区	9:50集合	10:20頃通過予定

5区 6区　箱根 ⇆ 小田原

函嶺洞門

5区	11:50集合	12:20頃通過予定
6区	8:20集合	8:50頃通過予定

4区 7区　小田原 ⇆ 平塚

JR国府津駅前

4区	11:15集合	11:45頃通過予定
7区	8:50集合	9:20頃通過予定

2区 9区　戸塚 ⇆ 鶴見

京浜急行新子安駅前

2区	8:45集合	9:15頃通過予定
9区	11:30集合	12:00頃通過予定

メッセージ募金のお願い

国学院大学では現在、オンライン上から陸上競技部のメンバーへ応援メッセージを直接投稿できる「メッセージ募金」（寄付）を募集しております。クレジットカード決済によりワンコイン（500円）から寄付が可能で、年間2,000円を超える場合は税制上の優遇措置が受けられます。匿名での申し込みも可能ですので、箱根駅伝初優勝に向けて奮闘する陸上競技部へのご支援・ご声援よろしくお願いいたします。

※メッセージ募金HP（**二次元コード**）上の「寄付目的」欄を変更いただくことで陸上競技部以外へのメッセージ募金・寄付の申し込みも可能となります。

問 財務部経理課（☎03・5466・0115）